

フィールドで味わう理論の手ざわり

— 理論とフィールドの相互関係を再考する —

企画責任者： 吉川 正人 (群馬大学)
話題提供者： 吉川 正人 (群馬大学)
名塩 征史 (広島大学)
木本 幸憲 (大阪大学)
五所 万実 (目白大学)

1. ワークショップの概要 (吉川)

1.1 観察・記述・説明と理論

言語やコミュニケーションの研究には現象の観察・記述・説明という3つの段階が存在する。観察とは現象を同定する段階を指し、記述とは現象を分類したり一般化することで整理する段階を指す。説明とは現象の背後にある要因やメカニズムを解明し「なぜそうなっているのか」を示す段階を指す。研究によってこのどの段階に重きを置くかは異なるが、「説明」を主とする研究では、個別の対象や現象の性質よりも一般的なメカニズムや原理に主眼点があり、その意味で「理論的」な様相を帯びる。一方で観察・記述を主とする研究では理論的な問題が意識されることは希である。特に「生身」の人間やその活動を対象とするフィールド研究においては、そこで生起する事象そのものを掘り上げるという「個別性」が研究の中心となっており、背後にある前提や現象を特定の見方で切り取り整理し一般化するための抽象的な枠組みには目が向きにくい。

しかし実際は観察・記述・説明の全ての段階に理論的な問題が関わっており、そのことに自覚的でないと、バイアスの影響を強く受けたり、紋切り型の記述を量産するような事態につながりかねない。逆に自覚的であれば、現象の新たな側面への気づきを促進したり、現象間の新たな共通点を見出すことが期待できる。本ワークショップではこのような観点から、一見すると理論と距離のあるように思えるフィールド研究にいかに関連的な問題が遍在しているかを確認し、理論の意義を再考すると共に、フィールド研究が理論(的研究)に対して様々な示唆を与えることで改訂と発展の契機となるということ論じる。これは抽象的・概念的領域にある理論をフィールドに「接地」させることでその「手ざわり」を際立たせる営みである。具体的には、フィールド研究と理論の多様な関わりを整理した上で、タイプの異なる3つのフィールド研究を通してフィールドと理論相互の貢献と影響を検討していく。

1.2 ワークショップの構成

本ワークショップは4つの話題提供から構成される。ワークショップのスケジュールを表1に示す。

導入	(10分)	ワークショップの概要説明(吉川)
第一話題提供	(25分)	理論とフィールドの関係性に関する整理(吉川)
第二話題提供	(25分)	「非参与観察」型フィールド研究と理論(名塩)
* 休憩	(5分)	
第三話題提供	(25分)	「データ採取」型フィールド研究と理論(木本)
第四話題提供	(25分)	「課題分析」型フィールド研究と理論(五所)
* 休憩	(5分)	
全体討論	(30分)	フロアを交えてのディスカッション

2. 理論の手ざわりを求めて: フィールドから理論へ, 理論からフィールドへ (吉川)

2.1 フィールドとフィールド研究

フィールドと理論の関係性について議論するにあたり、まずは伝・諏訪・藤井(2015)を参考にフィールドとはいかなる対象であるかについて考えてみたい。伝ほか(2015)は認知科学におけるフィールド研究に関する議論である

が、認知科学という分野自体が実験に基づく仮説検証や(計算的な)モデルに関する研究が中心であり、理論的傾向が強いという点を鑑みると、「理論とフィールド」の関係を考える際にも大いに参考になるものと考えられる。伝ほか(2015)はフィールドを以下のように定義している:

- (1) 「研究者によって設定された人工的な活動ではなく、当事者たち自身のリアルな動機や目的に基づく自発的な活動が繰り広げられる場」(伝ほか, 2015: 5)

そこには未だ解明されていない、場合によっては発見すらされていない活動のパターンや規則性が埋もれている可能性もあり、また当事者の抱える「課題」や「問題」が潜んでいるということもあるだろう。確かにこれらはフィールドに向いて初めて分かることであり、既存の資料や整備されたコーパス、質問紙調査や実験に基づくアプローチでは到達が困難である。

一方で、必ずしも「当事者」の「活動」が行われる場を対象とはしないフィールドの形も存在する。まさに名に「フィールド」を冠する「フィールド言語学」の実践においては、当事者の活動そのものというよりは、特定の言語における母語話者の言語知識を誘出(elicitation)やインタビューによって引き出し、当該言語の特性を記述することが目的になることが多いであろう。このようなタイプのフィールド研究においては、そもそも言語学的な分析を行うための一次資料が存在していないか、十分な量が無いという状況があり、母語話者の生活圏に向いて一次資料を収集するということが目的となる。

これらを含むフィールドの概念を規定することは難しいが、ここでは「当事者の自発的活動の場」を「当事者の自発的活動が展開され得る場」と広く解釈し、「フィールド研究」を以下のように定義する

- (2) a. 当事者の自発的活動が展開され得る場に関与し、
b. 当事者の活動そのもの、活動における課題・問題、当事者の日常知のいずれかを対象とする研究

2.2 フィールド研究のタイプ

上のようにフィールド研究を定義すると、当然ながら様々な異なる性質を持つ研究が包含されることになり、それらを「同質なもの」として議論することは時に混乱の元となる可能性がある。そこで、ここではフィールド研究を「フィールドとの距離」という観点で整理し、4つのタイプ分けを行う。ここで言う「フィールドとの距離」とは、フィールドにおける当事者の活動と研究者との距離を指す。また「距離」とは単なる物理的な遠近だけでなく、分析対象の性質も考慮した尺度である。観察される「ありのままの活動」から調査・研究者が自ら特定のやり方で現象を「切り出す」ことではじめて分析対象が明確になるような場合はより距離が近く、逆に当事者たちによって既に意識され、場合によっては議論されている特定の「課題」について分析を行う場合はより距離が遠いとみなす。(2b)の定義に沿って言えば、活動そのものが対象となる場合が最も近く、課題・問題が対象となる場合は最も遠い。日常知はその中間に位置するものとみなす。

まず最もフィールドと距離が近いタイプのフィールド研究が、文化人類学や社会学に多く見られる、所謂「参与観察」型のものである。参与観察は研究者自身が当事者の活動に参加し、その内部から自らの体験を通じた観察を行うものと言え、その過程で得た「主観」を内省的に分析することで当該の活動やコミュニティの分析を行うことになる。

次にフィールドとの距離が近いのが、活動への参加は行わずに「現地」で当事者たちが当該活動を行う様子を観察する「非参与観察」型の研究である。先に挙げた伝ほか(2015)の特集に投稿されているような相互行為を対象とした認知科学的研究にはこのタイプのものが多いだろう(e.g., 坊農, 2015)。明確な観察の対象が予め規定されていることも多いが、その性質は学術的な意味では「未知」であり、むしろその活動が「どのようなものとして捉えられるか」を見定めることが目的になっているとも言える。

これらのタイプでは何らかの「当事者による活動」が前提となるが、そうではないという点でさらにフィールドとの距離が大きくなるのが、フィールド言語学などで実践されている「データ採取」型のフィールド研究である。¹⁾このタイプのフィールド研究においては基本的には学術的に基礎づけられた一定の記述の枠組みが前提にあり、その枠組みが定める項目に沿って特定のフィールドにおける分析対象(e.g., 個別言語)の特徴を把握していくことになる。

最後に、最もフィールドとの距離が大きいフィールド研究の形として、「課題分析」型を挙げたい。このタイプの研究では当該フィールドにおいて当事者が抱える「課題」(e.g., いかにか効果的にサービスを提供するか)が特定されており、活動の観察や場合によっては提供される資料の分析などを通してその内実やメカニズムを解明することを目的とするため、分析対象の性質がある程度明確な状態から研究がスタートする。商店などの商業的な活動を対象とする

¹⁾ 前述のように誘出やインタビューなどを行うという点で単なる「収集」とも異なり、また記述のための一次データを「作り上げる」という性質も持ち合わせていることが多いことから、能動性と目的志向性を強く含意できる「採取」というタームを用いることにする。

サービスエンカウンター研究 (e.g., 平本・山内, 2017) や法言語学などがこれに該当するだろう。特に法言語学においては特定の場としてのフィールドは明確に定義することが難しく、裁判などの司法の仕組みにおいて法実務の従事者たちが抱える問題について研究を行い、また時に研究成果をフィードバックとして実務の現場に返すことで、研究実践自体が当事者の活動の一部に組み込まれるような場合も少なくないだろう。

2.3 フィールドと理論の様々な関わり

以上のようにフィールド研究を整理すると、いかにその実践に「理論」が関わっているかということが見えてくる。ここで「理論」と呼んでいるものは、「関連性理論」や「最適性理論」のような特定の理論体系を指すのではなく、広くそれらを含む、「モノの見方」の枠組みのことである。「観察の理論負荷性 (theory-ladenness: Hanson, 1958)」の問題が示すように、特定の理論に依拠せずに「生身」の目で対象を観察しようとしたとしても、その観察の背後には何らかの「見方」が反映されてしまっている。以降、「枠組み」というタームをこのような広義での「理論」を指すものとして用いる。

ここでは先に挙げた4つのタイプの内、「参与観察」型を除く3つのタイプについて考える。まず「非参与観察」型のフィールド研究においては、分析対象となる活動を「どのようなものとして捉えるか」ということが問題になる。これはいわば「観察の枠組み」の決定問題であり、一貫した枠組みで観察を行う、つまり対象となる現象を同定することによって、その輪郭が明確になり、「何を」分析すればよいかということが明らかになる。例えば、3節で提示される名塩による研究では、空手教室の指導場面において参加者(師範、指導者、練習生)の一連の活動を描出する際に「指標」という概念を用いており、その結果特有の現象の「切り取り方」が可能となっていると言える(詳細は3節を参照)。

「データ採取」型のフィールド研究においては、予め設定される「記述の枠組み」の決定問題として理論が関与する。言語研究においては、例えば「音素」という単位は記述の前提になっていると言えるが、どのような音素のセットを想定するか、そもそも「音素」という単位に実在性を認めるか、ということには様々な立場があり得る。また言語の記述においてどのような特徴を記述する必要があるか、という点においても異なる考えがあり得る。音韻・形態・統語を言語の中核とみなし、それのみを対象とする立場と、語用論的特性や相互行為的実践のパターンも重要な構成要素とみなす立場では、そもそも採取するデータの質と量が異なるだろう(詳細は4節を参照)。

「課題分析」型のフィールド研究においては、事前に設定された当事者の抱える「課題」が一体いかなる要因によってもたらされているか、という「原因」や「メカニズム」に対する「説明の枠組み」の決定問題が関わってくる。例えばレストランにおける注文場面のサービスエンカウンター分析を行った平本・山内(2017)は、「状況への気付き」という観点から、「何に気づくべきか」に関する社会的規範を用いた「説明」を行っている。言い換えれば、このような規範の存在を仮定することで、「気付き」によるサービスの提供可否やその質について体系的な説明を与えることができる(法言語学に関する事例や詳細については5節を参照)。

2.4 フィールドと理論の互恵性

伝ほか(2015: 7)は「予期せぬものごとと遭遇しうることを観察者である私たちが如何に意識するか」ということが「フィールド研究の醍醐味」の一つであると述べている。「予期せぬものごと」は、「観察の枠組み」では「同定」することのできない現象ということもあるであろうし、「記述の枠組み」で分類や一般化できない現象ということもあるだろう。また「説明の枠組み」で要因やメカニズムを提示できない現象ということもあるかもしれない。これは出くわした段階では困った事態であるが、同時に、前提としていた枠組みを修正したり変更したりする契機にもなる。

このような事例としては、Everett (2005) によるピダハン語 (Pirahã) の研究が挙げられる(関連する議論は4節も参照)。Everett (2005) はヒトの言語に共通して見られる本質的特性とされる「再帰 (recursion)」という性質がピダハン語には備わっていないということをフィールドで得た観察と記述から導きだした。これは「再帰」という構造を前提とする記述の枠組みではピダハン語がうまく記述できないという問題であり、かつ「再帰」を中心に据える文法理論という説明の枠組みではピダハン語の諸現象を扱えないという問題でもあるが、同時に、「再帰」を前提としない新たな文法理論や言語の本質論を構築する必要性を提起することにも繋がる(より包括的な議論については例えば Evans & Levinson, 2009 を参照)。

そうして修正・変更された枠組みがフィールドにおける諸現象をよりうまく観察・記述・説明することができれば、フィールド研究にとっても有益なものとなるだろう。このように、フィールド研究と理論は相互に恩恵を与え合う互恵的な関係にあると言える (Cf. 好井・三浦, 2012)。

3. 非参与観察型のマルチモーダル分析研究における「指標」(名塩)

3.1 指標：社会化された認識・言語使用・身体

指標 (index) とは、「今ここ」のコンテキストで起こっているコミュニケーション出来事において現れる記号（ことば、眼差し、ジェスチャー、身構え、身体、人間など、観察可能な現象）とそのコンテキストの中にある構造との指示関係である (Silverstein, 1993; 小山, 2009). ここでいうコンテキストには、「今ここ」の出来事に最も直接的に関係するものから順に、1) 環境や身体といった知覚可能な事物事象の領域、2) 各行為主体の内部にある知識・経験・思考の領域、3) 社会文化的な慣習・規則・価値観などの領域があり、1) に近い要素ほど、現行の活動の進展に伴って随時更新され、その様相が変化し、3) に近い要素ほど、恒常性・抽象性が高く、現行の活動に影響して逐一変容することはない (小山, 2009; 名塩, 2021). 我々の社会的な行為は、こうしたコンテキストとの多様な指標関係を顕現する記号として捉えることができる。

3.2 参加者の振る舞いに表れる社会的規範と活動の規範：年少者向け空手教室における稽古場面を例に

一方、こうした指標関係の表出は、各人の社会化の度合い（所属する社会への理解度／適応度）によって、その様相に微妙な差異が生じる (名塩, 2021). 同じ活動に参加する参加者間であっても、当該活動についての認識（個々人の内に構築された知識や経験の総体）は、活動歴の差を反映して相応に異なるものと考えられる (cf. 名塩, 2024). また、Mey (2001) は、我々は常に社会によって力づけられ限界づけられた上での自由な行為者であり、我々の行為は常に社会的なコンテキストの枠組みの中で実践的意義を持つ「語用実践行為」であるとした。実際の活動場面では、上記のような認識の差異を、限界づけられた自由の範囲で、各参加者が主体的に埋めようとする、または埋めようとして失敗する、さらには埋められずに戸惑うなどの様相が、様々な出来事として立ち現れてくる。つまりは、そうした活動の「淀み」の指標関係を辿ることで、直接的には観察し難い認識や社会性に関する参加者間のズレを捉えることもできると考えられる。

本話題提供では、静岡県静岡市の某所で行われた年少者向け空手教室での稽古場面を対象としたマルチモーダル分析を通して、各参加者の当該活動への認識、もしくは参加者間の認識の差異を指標する出来事の様相について記述する。対象となった空手教室には、中心的な指導者となる師範 M と、M の指導を補助する指導者 I (有段者) が 2 名、成人の練習生 S が 2 名、そして、小中学生の練習生 s が 20 名ほど参加している。

断片 1 は、稽古開始から準備運動を経たあとに行われる基本動作の反復練習の合間に起こった一連のやり取りである (図 1)。この中では随所で、一般的な社会的行為として望ましい振る舞いが、当該活動に似つかわしい形で実践されている。断片 1 の直前では、指導者 I の号令に合わせて全員で「内受け下段払い」の反復練習をしたあと、一旦手足をほぐして次の練習に備える短い時間が設けられた。そこで M は特に前触れもなく、s1 に向けて「前出て」(01 行目) と指示を出している。s1 は、これに対して、若干の間 (溜め) を置いたあと「押忍」という空手特有の語彙を用いて返答し、同時に鳩尾あたりで重ねた両手の拳を八の字を描くように左右に動かした (02-03

断片 1: s1 の取り出し・手刀顔面打ち

01	M:	はい {s1} 前出て
02	s1:	(0.7) [押忍
03	s1:	[(両拳を鳩尾から左右に動かす)
04		(駆け足で [前]に出る)
05	M:	####
06		はい {s1} だけ ¹ 右三戦立ち ^{1/} : 用意
07		構えて
08	s1:	[<K!]
09	s1:	[(¹ ^{1/})
10	M:	はい ² 手刀顔面打ち ^{2/} ::
11	s1:	(² ^{2/} 右手で)
12	M:	左手で構えて::
13		左手で [構えて::
14	s1:	[(² ^{2/} 左手で)
		~~< s1 による試技 (23 秒) >~~
15	M:	はい ³ 直れ ^{3/} ::
16	s1:	[(³ ^{3/})
17	M:	[はいそこにいて:=
18		=[体ぜん: たい使ってるだろ
19	M:	[(右を向き, 右に 2, 3 歩移動)
20	S1:	押忍
21	M:	[ちっちゃいけどな
22	M:	[(→ 右側にいる誰か?)
23	S1&2:	押忍



図 1: 参加者の配置



図 2: 03 行目

行目、図2)。その後、他の練習生を避けるように駆け足で隊列の外側を回り、練習生たちの前方に立った(03行目)。指導者からの指示に対して返答し指示通りに動くという反応は、社会的な振る舞いとして当然であるが、それだけでなく、ここでのs1の振る舞いは、空手の稽古という活動の場に似つかわしい仕方で行われているのがわかる。特に「押忍」という語彙と八の字を描く仕草は、空手特有の振る舞いであり、s1自身が空手の実践者として十分に社会化されその場をコンテキスト化する指標記号であることを明示している。一方、Mの指示によって行われたs1の試技が終了した直後の18行目で、Mは練習生全員に対して「体ぜん: たいつかってるだろ」と、ここでの指導の意図を明かしつつ、同意を求める発話を行なっている。しかし、それに対して「押忍」と声に出して返答したのは成人の練習生S1だけであり、その直後に追加された「ちっちゃいけどな」というMの発話の後も、「押忍」と返答したのはやはり成人の練習生S1とS2だけだった。そもそも空手の稽古は「制度的環境」(institutional setting: Drew & Heritage, 1992)であり、師範の働きかけに対する練習生の反応には、制度的/形式的な制限がある。通常は、師範の指示/指導には黙って従うか、頷きや「押忍」の発語によってわずかに反応を示すだけで、特に稽古中の練習生の発話は、極力控えるべきものとされている。こうした師弟間の非対称性を踏まえ、Mのどの指示/指導に対して「押忍」を返すかという選択が、いかに難しいかが伺える。特に、練習生全員に向けられた指示/指導に対して「押忍」を返すのは、ここでの事例のように、成人の練習生Sだけが行うか、Sが率先して行い、場合によってはその他の練習生sがそれに追従するというケースがほとんどである。このように出来事の指標を辿ることで、Sとsの活動への適応度の差を捉えることができる。

3.3 コンテキスト、もしくは、認識の変容への適応

断片2は、まだ稽古歴の浅い3名の練習生s2-4に対して、形の指導を行なっている場面である。直前で「太極その2」と呼ばれる形の試技を終え、ここでは次の「太極その3」に入る前に道着を整え、練習生の立ち位置を調整する時間をとっている。注目すべきは、Mの発話スタイルの切り替えである。通常、指示/指導の際にはいわゆる「だ/である体」や「命令形」等を用いるMは断片2の05行目で、突如として「です/ます体」を使用する。04行目で汗を拭きながら練習生に近づくMは、s2, s3, s4の順番に直接肩を持って立ち位置を決めながら、「気持ちに余裕が、ありますか」と、それまでとは明らかに異なる口調でs2-4に話しかけている(05行目)。その後、スタイルは「だ/である体」に戻るものの、Mは明らかに指導中とは異なる穏やかな口調で、「余裕の有無」について「いっぱいいっぱい」と発話を繰り返しながら、s3, s2, s4の順に視線を配る(12-18行目、図3-4)。その後、Mは練習生に背中を向けながら厳しい口調に戻り、19行目で「はい太極その3」と次の形の名称を宣言した。一方、練習生s2-4はこの一連のMの振る舞いと問いかけに対する明確な反応は、16行目に見られるs2頷きだけだった。他の局面で練習生らは頷き一つ示さないまま、この一連のMの問いかけに対し、若干の戸惑いを見せつつ半ば聞き流すように立ち尽くすだけだった。

02行目の「はい休め」という掛け声は、明らかに練習に区切りをつけるものと考えられるが、決して稽古の終了を意味するものではない。そのため特に練習生らにとっては、03行目以降も稽古は続いており、その稽古の規範を踏まえて空手を学ぶ者らしく振る舞わねばならない。しかし、Mが05行目で行なった口調の変更や態度の和らげは、明らかにそれまでの稽古の緊張感をほぐし、練習生を労おうとする意図が感じられる。このMの振る舞いの創出的な指標によって、05-18行目での出来事をテ

断片2: 形「太極」の練習場面

- | | | |
|----|-----|--------------------------|
| 1 | M: | はい直れ |
| 2 | | はい休め |
| 3 | | はい裾直して: : |
| 4 | M: | (3.0) (汗を拭きながら練習生に近づいてく) |
| 5 | M: | [やってて、気持ちに余裕が、ありますか |
| 6 | M: | [(s2の肩を持って立ち位置を調整) |
| 7 | M: | やってて [気持ちに余裕がある |
| 8 | M: | [(s3の肩を持って立ち位置を調整) |
| 9 | M: | [次はこう行くぞ: ああ行くぞ: って |
| 10 | M: | [(s4の肩を持って立ち位置を調整) |
| 11 | M: | 気持ちが考えられる |
| 12 | | [いっぱいいっぱい |
| 13 | M: | [(→s3) |
| 14 | M: | [いっぱいいっぱい |
| 15 | M: | [(→s2) |
| 16 | s2: | (頷く) |
| 17 | M: | いっぱいいっぱい |
| 18 | M: | (→s4) |
| 19 | M: | [はい太極その3 |
| 20 | M: | [(振り返って練習生に背中を向けながら) |



図3: 12-13行目



図4: 14-16行目

スト化するコンテキストの様相は一時的に変容し、空手の稽古をめぐる規範からの影響が当該コンテキストにおいて弱まることが期待される。それに伴い M と s2-4 の関係は、空手の稽古における厳格な師弟関係から、一般的な指導・学習場面における指導者と学習者の関係に、もしくはより一般的な大人と子供の関係に近づいていくはずである。しかし、このコンテキストの変容や、それを受けての認識の再編は、当該稽古の統括を担う師範という立場であればこそ容易に達成されるのであって、それが練習生との間で共有されることはなかったようである。ここでの戸惑いを含む練習生らの振る舞いが、当該活動における彼らの未熟さや、師範 M との立場の違い、認識の差異を顕現していると言えるだろう。

3.4 まとめ：社会の中の活動・活動の中の相互行為

空手の稽古は、一般的な社会的規範のもとで行われる活動であり、その活動を構成する一つ一つの振る舞いもそうした社会的規範に則して行われる。同時に、それらの振る舞いには当該稽古に特化した規範も反映され、実際に観察される出来事は、そうした複数の規範を同時に指標する記号として立ち現れてくる。稽古中の指導者／学習者がその場の制度や慣習に即して振る舞う社会化された当事者として認められる場合、彼らの発話や身体動作は常に当該稽古をコンテキスト化し、それがいかなる活動かを伺わせる諸要素を指標する記号として機能している。こうした出来事の指標機能を前提とすることで、本研究のような非参与観察型のマルチモーダル分析に基づく議論の射程が、活動の中の相互行為をめぐる社会や認識へと広がることが期待される。

4. 言語理論とフィールド研究の相互作用 (木本)

4.1 言語理論とフィールド研究の通史

世界には、7000 前後の言語があるとされている。SIL International による *Ethnologue* での統計によると 7164 の言語が挙げられている (Eberhard, Simons, & Fennig, 2024)。言うまでもなくそれらの言語には多様であり、アドホックな記述を避けるには理論が必要となる。音韻の記述においては、どの音素を立てるか、どのような手続きで認定するか、形態統語論においては、どの品詞 (語類) を認めるか、形態論、統語論、意味論をどのように組み合わせて各品詞を認定するか、プロトタイプ性を認めるか、など理論的に考えなければならない点が多い。

実際、近代言語学が学術的営みとして行われてきたここ 1 世紀の間、言語理論とフィールド言語学は長い相互依存の関係にある。20 世紀前半は、アメリカ構造主義時代、伝統文法を中心とするフィールド研究が展開されてきた。ここでは、現在から見ると西洋の言語の文法カテゴリーを自明のものとして当てはめてきたという問題はある。しかし、言語記録という点では、テキストの注釈、文法記述におけるデータ量は目を見張るものも多く、理論的に前時代的だからと言って棄却できないほどの重要性を持っている。

1960~70 年代には、Chomsky による (変形) 生成文法、Fillmore の格文法、Kenneth Pike によるタグミクスに依った文法記述が世界各地で試みられた。この時代の研究は、フィールドに多くの理論的応用が試みられた時代である。しかし、さまざまな理論が乱立した結果、今となっては貴重な言語の記録も解読困難な記述に陥っていることも多い。またデータの質としても、少数の作例のみで構成されていることも多く、今日顧みられる機会が少ない一つの要因にもなっている。

1980 年代からは、現代に続く機能主義的類型論が言語記述に重要な役割を果たすようになってくる。認知言語学、Robert Van Valin らの役割指示文法 (Role and Reference Grammar)、Simon Dik の機能文法、Talmy Givón の談話機能主義などの枠組みやそこで重要なテーマとなった、品詞分類、格標識体系、ヴォイス、文法化と通時的变化、節連結などがこの時代に盛んに議論された。

2000 年代になると、言語使用や社会に開かれた研究が増加する。まず危機言語に対する応答として、Himmelman (1998) によって提唱された言語ドキュメンテーション (一次資料の保存、記録を重視するアプローチ) が重要視されるようになってきた。理論的にも認知言語学・機能主義言語学における使用基盤のアプローチや、Levinson, Cutfield, Dunn, Enfield, & Meira (2018) らのダイクシス・空間指示枠の研究によって、会話の場・環境、言語使用の姿を克明に記録・記述する重要性和面白さが認知されるようになった。その結果、談話で収集した実例を典拠にしたフィールド言語学の研究は今やスタンダードとなっているほか、少数言語の参照文法に、言語活性度の分析などの社会言語学的状況の記録が一般的に見られるようになってきた。

一見すると言語記述は言語理論とは独立して地道に事例収集が試みられてきたと思われるが、実際にはその時代の理論やアプローチに強い影響を受けながら記述が進められてきたと言える。

4.2 言語理論からフィールド研究へ –共同注意と指示詞–

上述したように、Levinson らのダイクシス・空間指示枠の研究は、フィールド研究に新たな可能性をもたらした。木本 (2024) では、フィリピンで話されるアルタ語 (Arta/Edilod) の指示詞体系において、空間的な領域の区分 (話し手の近くでは近称が使われる, など) に加え、共同注意が行われているかどうかという観点を取り込むことで十分な指示詞の用法記述ができることを明らかにした。例えば、以下の談話では、近隣の 3 校の小中学校について語っている。問題となる 2 学校が最初に指される際は、それぞれの方角を指さして遠称 ayta 「あそこ」が使われた。しかし続く談話では、それぞれの方角を指さしながらも中称 aytina 「そこ」や近称 ayti 「ここ」に変化する。(3) の発話では中称 (ay)tina 「そこ」が用いられている。その対象に注意が向いているかどうかによって、指示詞が交替することを示している。これは、近年の発話時における共同注意の状態などに着目した研究 (Diessel, 2006; Levinson et al., 2018) が有効であることを示唆している。

(3) (何年生まで学校に行けるか, という質問のあと)

Aytina, kigad ta grade six, amma nasungdu, aydi:de:=tina.

中称 まで 斜格 6年 もし 終わる 次=中称

「あそこは 6 年生までで、卒業したら、次はあっち (に行く).」

4.3 フィールド研究から言語理論へ –補文節を好む言語と避ける言語–

一方でフィールド研究から言語理論へ示唆を与えてきたケースも多い。再帰性 (recursion) や埋め込みをめぐるピダハン語の議論も記憶に新しい。ここでは、埋め込みに関わる Kimoto et al. (2024) の議論を紹介する。Kimoto et al. (2024) では、16 言語についてフィールドに赴いて同一の課題を課し、その談話を収録したデータを分析対象として、補文節の頻度を調査した。特に補文節とその代替手段として用いられる副詞節 (従属節であるが埋め込みが見られない)、並置節 (従属節でも埋め込みでもない) の頻度を言語毎に調べたところ、図 5 のようなばらつきがあることが明らかになった。

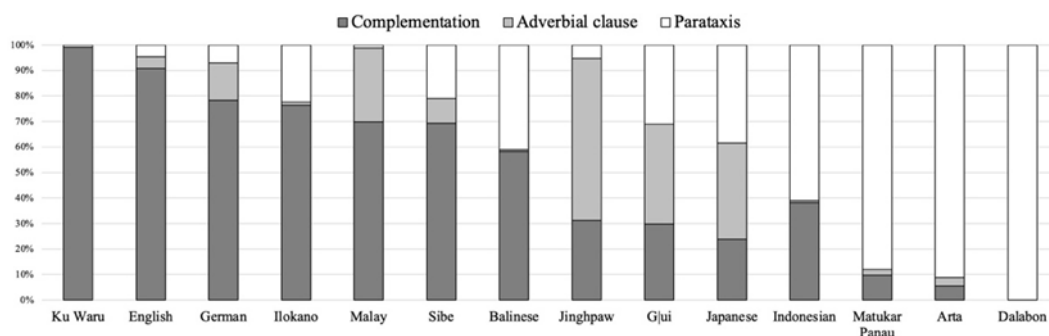


図 5: 補文節, 副詞節, 並置節の割合 (Kimoto et al. 2024: 150)

補文節は言語ごとの偏りが大きく、通常の談話では (例えば文法的に容認されたとしても) その使用が避けられるケースが多いことを示している。補文節は存在することが一般的であるかのように多くの言語理論に含まれているが、実際には避けられることが多い構文現象であることを示唆する。言語は、地域、語族、スタイル・ジャンル、伝達媒体、その他社会的要因によって大きな変動を示す。少数の書き言語を元にした理論構築では見えない多様性をフィールド研究から明らかにすることができる。

5. 法言語学における理論とフィールドの相互作用 (五所)

法言語学とは、言語学の理論や方法論を法領域に応用する学問分野である。特に、本話題提供では、商品・サービスを区別するための「商標 (trademark)」に関する研究を取り上げ、法言語学における理論とフィールドの相互作用について考察する。商標研究における主要テーマの一つは、消費者の混同を招くほど類似する商標であるか否かという「商標の類否」問題である。類似商標の使用 (登録) は、ブランド保護や消費者保護の観点から多くの国で禁止されており、登録審査や商標権侵害の場面で問題となる。商標の類否は、一般的に、商標を構成する外観、称呼、觀念および使用文脈に基づき総合的に判断される。商品の種類 (日用品・高級品) によって変わる消費者の注意力や取引方法といった使用文脈も考慮されるため、単純な比較とはならないが、特に文字商標の類似性については、言語学や心理学の理論を応用した裏付けや分析ができるだろう。

表 2: 社会認知的枠組みに基づく「顕著性」の分類 (Schmid & Günther, 2016)

期待の発生源	期待のメカニズム	期待通り	期待外れ
長期記憶 (認知的文脈)		認知的定着 (「馴染み深い」)	新規性 (「はじめて聞いた」)
言語/状況/社会的な文脈		高い共起性・関連性 (「〇〇ときたら△△」)	意外性 (「そうくるとは思わなかった」)

5.1 顕著性から捉える商標の要部性

商標の構成中、特に消費者の注意を引き、独立して「識別力」(自他商品を区別する機能)を発揮する部分(「要部(dominant element)」)が確認された場合は、要部を重視した比較が行われる(金井・鈴木・松嶋, 2022)。複数の要素から構成される結合商標の場合、特にこの要部認定が重要となる。ある事件では、「ゲンコツコロッケ」という普通名称を含む商標の構成中、「ゲンコツ」が要部とされ、先行商標「ゲンコツ」とは類似すると判断された。²⁾ Hotta & Fujita (2012) は、要部の認定手法について、認知的負荷を伴う「有標 (marked)」という概念を導入した分析モデルを提案している。一方、Gosho (2024) は、社会認知的枠組みに基づく「顕著性 (salience)」のモデルを用いて要部性を考察している。Schmid & Günther (2016) は、「長期記憶に基づく認知的文脈」と、「言語的・状況的・社会的な文脈」に基づく期待に分け、それらが「期待通り」か「期待外れ」かによって、顕著性を4種類に分類している(表2)。

この枠組みに基づけば、従来、要部は新規性や意外性といった注意を引く部分と考えられてきたが、それとは対照的に、定着度や共起性といったアクセスの容易性に基づく要部性も考慮する必要があるだろう。アクセスの容易性に基づく要部性の例として、McDonald's の Mc-接辞があげられる。「McLanguage」と称し、McChicken や McNuggets など一連の商標を保有する McDonald's は、混同のおそれなどを理由に、McSleep Inn (米国ホテルチェーン) や MacJoy & Device (フィリピンのファーストフード店) など、第三者による Mc-接辞を含む商標の使用を制限してきた。³⁾ 商品や広告を通じた McLanguage の展開により、Mc-接辞と McDonald's の連想関係が定着したことで、Mc-の顕著性(要部性)が高まったと考えられる(Gosho, 2024)。

共通点がわずかであっても、それが認知的に重要であれば類似性が高く評価されることは多々ある。たとえば、自分と相手が「似ている」と感じる際、実際には多くの共通点(「血液を循環させる」「二足歩行する」など)が存在する中で、「同じ学校を卒業している」や「共通の趣味を持つ」といった一部の特徴だけに注目しているに過ぎないことがある(澁谷, 2013)。同じように、外観、称呼、観念に関するすべての共有特徴が考慮されているとは考えにくい。ため、判断の焦点や類似性が見出されるメカニズムを理解することが重要となるだろう。

5.2 構造整列モデルから捉える商標の類否

類似性判断と非類似性判断は裏表の関係にはなく、異なる心理プロセスが働いている。類似性には、個々の構成要素が持つ特徴に焦点を当てる「属性類似」と、それらの構造的関係に焦点を当てる「関係類似」があり、類似性判断では関係が重視される一方、非類似性判断では属性が重視されるという(Medin, Goldstone, & Gentner, 1990)。また、類似性判断には、構成要素やそれらの関係構造を対象間で対応づけるプロセス(「構造整列 (structural alignment)」)が関与することがわかっている(e.g., Markman & Gentner, 1993; Gentner & Markman, 1997)。つまり、類似性は特徴比較を超えた構造比較によって見出されるということだ。構造整列は、構文習得においても重要となる(e.g., Tomasello, 2003)。先にあげた McLanguage は、Mc-接辞が特定の概念(食品など)と結びつき繰り返し使用されることで、一貫した McDonald's のブランドイメージを認識させる構文として定着している。そのため、「Mc+普通名詞」という形式は Mc 構文の事例として認識され、McDonald's が連想されやすくなると考えられる。長年にわたる McLanguage の使用によって強固な識別力が獲得された一方で、観念類似とされる商標が生じやすくなるという課題も生まれた。観念の同一または類似によって類似範囲を画定すると、外観や称呼がまったく異なる商標まで類似と判断されることにつながり、類似範囲を過度に広げてしまうおそれがある(西村, 2018)。商標の類否判断では、他者の創造的表現や自由な名称選択が制約される可能性も含めて保護範囲を設定していくことが求められる。

構造整列モデルは、視覚や概念に関する類似性のみならず、単語間の音韻的類似性を説明する際にも有力な枠組みとなる。音素の挿入による違い(整列不可能な差異)は、置き換えによる違い(整列可能な差異)よりも、類似性に

²⁾ 平成 29 年(行ケ)第 10169 号 審決取消請求事件

³⁾ Quality Inns International, Inc. v. McDonald's Corp., 695 F. Supp. 198 (D. Md. 1988); MacJoy Foods, Inc. v. MacJoy Fastfood, G.R. No. 166115, February 2, 2007.

与える影響が小さいことや、頭子音 (onset) の一致よりも尾子音 (coda) の一致の方が類似性に及ぼす影響が大きいことがわかっている (Hahn & Bailey, 2005)。これらの知見は、商標実務において音韻的類似性を評価する際の助けとなるだろう。

5.3 語の解析性から捉える商標の分離性

先に述べた通り、結合商標の場合、特に要部認定が重要となるが、要部と認定されるためには、その部分が商標全体から分離して認識されることが前提となる。つまり、構成要素に分解して認識されるか否かという語の処理方法が、類否判断に大きく関わってくる (cf. 五所, 2021)。形態的に複雑な語の処理には、「直接ルート」(語全体を一体として処理) と「解析ルート」(語を構成要素に分解して処理) の2つがある (Baayen, 1993)。解析性 (parsability) には、語形成パターンの生産性や語基と派生語の相対頻度 (語基 ÷ 派生語) などが密接に関わっている (Hay & Baayen, 2002)。先にあげた「ゲンコツコロッケ」事件に対して、同じ「ゲンコツ+食品名」の構造を持つ「ゲンコツメンチ」は一体とみなされ、先行商標「ゲンコツ」とは非類似と判断された。⁴⁾ 両商標が異なる類否結果となった背景には、解析性の違いが関係していると考えられる。ここで、語基と派生語の相対頻度という観点から「ゲンコツコロッケ」と「ゲンコツメンチ」の解析性を比較してみたい。まず、「ゲンコツコロッケ」と「ゲンコツメンチ」は jaTenTen11 コーパスでヒットしなかったため、同程度に使用されていると仮定し、主要部である「コロッケ」と「メンチ」を語基と捉え相対頻度を推定した。相対頻度が高い (つまり、語基が派生語よりも頻度が高い) 場合に解析されやすくなるが、「コロッケ」の頻度が 29,102 だったのに対し、「メンチ」はわずか 3,480 であった。このことから、「コロッケ」の方が相対頻度が高い、つまり分解 (分離) されやすいと推定されるため、「ゲンコツ」とは類似と判断されたと考察できる。

5.4 フィールドデータが理論にもたらす影響

特許庁や裁判所のデータベースには、類否判断に関する膨大なデータが蓄積されている。これらのフィールドデータを活用して言語理論を検証することで、理論のさらなる精緻化が図れるだけでなく、実務における類否判断の透明性や予測可能性の向上が期待できる。法言語学におけるこのようなアプローチは、理論をフィールドに応用するだけでなく、フィールドからのフィードバックを通じて理論そのものを発展させるという双方向的な意義を持つ。大々的なキャンペーンで広まった McLanguage の影響により、今では「McJob (低賃金でスキルを必要としない仕事)」や「McMansion (大きくて豪華だがデザインや品質に欠ける住宅)」といった軽蔑的な使用 (pejorative use) もみられるようになった。このように、経済活動を通じて消費者の心に根付く商標は、市場の動向に応じて進化しながら言語体系に新たな価値や意味をもたらしている。商標にみる名前の記号的ふるまいは、従来の固有名詞学に新たな視座をもたらす可能性があるだろう。

参考文献

- Baayen, H. (1993). On frequency, transparency, and productivity. In G. Booij & J. van Marle (Eds.), *Yearbook of morphology 1992* (pp. 181–208). Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- 坊農真弓. (2015). ロボットは井戸端会議に入れるか. *認知科学*, 22(1), 9-22.
- 伝康晴・諏訪正樹・藤井晴行. (2015). 特集「フィールドに出た認知科学」編集にあたって. *認知科学*, 22(1), 5-8.
- Diessel, H. (2006). Demonstratives, joint attention, and the emergence of grammar. *Cognitive Linguistics*, 17(4).
- Drew, P., & Heritage, J. (1992). Talk at work: An introduction. In P. Drew & J. Heritage (Eds.), *Talk at work: Interaction in institutional settings* (pp. 66–100). New York: Cambridge University Press.
- Eberhard, D. M., Simons, G. F., & Fennig, C. D. (Eds.). (2024). *Ethnologue: Languages of the world. twenty-seventh edition*. Dallas, Texas: SIL International.
- Evans, N., & Levinson, S. C. (2009). The myth of language universals: Language diversity and its importance for cognitive science. *Behavioral and brain sciences*, 32(5), 429–448.
- Everett, D. L. (2005). Cultural constraints on grammar and cognition in Pirahã. *Current anthropology*, 46, 621–646.
- Gentner, & Markman, A. B. (1997). Structural alignment in analogy and similarity. *American Psychologist*, 52(7), 45–56.
- 五所万実. (2021). 商標言語学の試み: 類否判断における認知言語学的考察. 山梨正明 (編), *認知言語学論考* no.15 (pp. 181–212). 東京: ひつじ書房.
- Gosho, M. (2024). *A socio-cognitive approach to language in legal judgments: Toward trademark linguistics*. Unpublished

⁴⁾ 平成 28 年 (行ケ) 第 10164 号 審決取消請求事件

- doctoral dissertation, Keio University, Japan.
- Hahn, U., & Bailey, T. M. (2005). What makes words sound similar? *Cognition*, 93(7), 227–267.
- Hanson, N. R. (1958). *Patterns of discovery: An inquiry into the conceptual foundations of science*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hay, J. B., & Baayen, R. H. (2002). Parsing and productivity. In J. Booij, G. E. van Marle (Ed.), *Yearbook of morphology 2001* (pp. 203–235). Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Himmelman, N. P. (1998). Documentary and descriptive linguistics. *Linguistics*, 36(1), 161–195.
- 平本毅・山内裕. (2017). サービスエンカウンターにおける店員の「気づき」の会話分析. 質的心理学研究, 16(1), 79-98.
- Hotta, S., & Fujita, M. (2012). The psycholinguistic basics of distinctiveness in trademark law. In P. M. Tiersma & L. M. Solan (Eds.), *The oxford handbook of language and law* (pp. 478–486). Oxford: Oxford University Press.
- 金井重彦・鈴木将文・松嶋隆弘 (編). (2022). [新版] 商標法コンメンタール. 東京: 勁草書房.
- 木本幸憲. (2024). ダイクシスと共有知識、共同注意 –アルタ語 (フィリピン) の指示詞の使い分けについて–. 日本語用論学会第 27 回大会 (2024 年 11 月 30 日, 大阪大学).
- Kimoto, Y., Shiohara, A., Barth, D., Evans, N., Kogura, N., Arka, W., Kashima, E., Kasuga, Y., Kawakami, C., Kurabe, K., Narrog, H., Nomoto, H., Ono, H., Pratiwi, D. P. E., Rumsey, A., Schalley, A., & Yokoyama, A. (2024). Syntactic embedding or parataxis? corpus-based typology of complementation in language use. In D. Barth & N. Evans (Eds.), *The social cognition parallax interview corpus (scopic)* (pp. 126–162). Honolulu: University of Hawai'i Press.
- 小山亘. (2009). シルヴァスティンの思想：社会と記号. マイケル・シルヴァスティン (著), 小山亘 (編), 榎本剛士・古山宣洋・小山亘・永井那和 (共訳), 記号の思想 現代言語人類学の一軌跡 マイケル・シルヴァスティン論文集 (pp. 11–233). 東京: 三元社.
- Levinson, S. C., Cutfield, S., Dunn, M. J., Enfield, N. J., & Meira, S. (Eds.). (2018). *Demonstratives in cross-linguistic perspective*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Markman, A. B., & Gentner, D. (1993). Structural alignment during similarity comparisons. *Cognitive Psychology*, 25(4), 431–467.
- Medin, D. L., Goldstone, R. L., & Gentner, D. (1990). Similarity involving attributes and relations: Judgments of similarity and difference are not inverses. *Psychological Science*, 1(1), 64–69.
- Mey, J. L. (2001). *Pragmatics: An introduction second edition*. Malden: Blackwell.
- 名塩征史. (2021). 会話への途中参加を巡る動機付けと許容に関する認知語用論的考察—理容室でのコミュニケーションを対象とした事例分析をもとに—. 田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝 (編), 動的語用論の構築へ向けて 第 3 巻 (pp. 162–181). 東京: 開拓社.
- 名塩征史. (2024). 活動の中の相互行為と主体の認識：三味線の稽古における「教える」話しぶり／「学ぶ」話しぶり. 渋谷良方・吉川正人・横森大輔 (編), 新しい認知言語学：言語の理想化からの脱却を目指して (p. 253-275). 東京: ひつじ書房.
- 西村雅子. (2018). 先行商標の希釈化に関する一考察. 日本知財学会誌, 14(3), 7–14.
- Schmid, H. J., & Günther, F. (2016). Toward a unified socio-cognitive framework for salience in language. *Frontiers in psychology*, 7, 1110.
- 澁谷覚. (2013). 類似性の構造と判断 –他者との比較が消費者行動を変える. 東京: 有斐閣.
- Silverstein, M. (1993). Metapragmatic discourse and metapragmatic function. In J. A. Lucy (Ed.), *Reflexive language: Reported speech and pragmatics* (p. 33-58). Cambridge: Cambridge University Press.
- Tomasello, M. (2003). *Constructing a language: A usage-based theory of language acquisition*. Cambridge, MA.: Harvard University Press.
- 好井裕明・三浦耕吉郎. (2012). 公募特集: 「社会学理論とフィールドの互酬性」によせて. 社会学評論, 63(2), 180-184.